

# 読者のページ

## コミュニティ行政の問題点について

戸塚区役所 榊原和雄

前号で地域施設の管理・運営について特集が組まれたが、私は昭和五十三年に本市に採用された仲間と、コミュニティ行政と地区センターの役割について研究会を行っているので、同会での議論も含めて、コミュニティ行政の問題点を二、三指摘したい。

まず、コミュニティ創造の困難性がある。我が国では、コミュニティは、高度経済成長政策により、地域共同体が崩壊し、都市化が進行する中で、失われた人間性回復の場として位置づけられているが、はたして、西

欧型社会の中で生まれたコミュニティが我が国に根づくであろうか。特に、職場を中心とするタテ社会の組織に信頼を置く、我が国の人間関係の特色からみて、ヨコの人間関係確立の困難性は、充分検討されてよいと思う。このことは、地区センターが、コミュニティ形成の核となるか、単なる貸し館となるかに係わってくる。

次に、行政はコミュニティ造りにどれだけ係わって行くべきか、本来、コミュニティは住民みずから形成するものではないか、という議論がある。具体的には、地区センターの自主事業の範囲に係わってくる。

さらに、地区センターには、住民参加機関として、運営委員会や運営協議会が設けられているが、これらの構成メンバーには、地域団体の占める割合が高いため、広い層の住民の声を反映しきれない面がある。また、市直営施設に設けられている運営協議会については、行政側との役割分担を明確化する必要があるであろう。

以上、コミュニティ行政をめ

ぐる若干の問題点について述べてきたが、本年秋には、これら解明の糸口とすべく、地区センター利用者の意識調査を行いたいと考えている。

## あらまほしい「川」

旭区役所 富永 修

ちょっと無理かな、と弱気になりつつも、日頃から感じていた「川」とくすの木広場について希望をのべてみたい。

正直、私は横浜市には、文化都市というイメージをもっていない。その理由の重要なところに、中心部での自然のなご、もう少し具体的にいえば、憩いの場として考えうる川のないことがある。ここ何年かで、市役所周辺は急速に整備された。しかしそれは、川にはコンクリートの蓋をし、くすの木広場といえ、通路は敷石をしきつめ、コンクリートの枠の中に植木をさかせる、というやり方である。市は、つまり行政は、川に何を期待しているのだらう。何を考えて、くすの木広場はコンクリートでかためてあるのだらう。

偏頗な感傷にすぎぬと写るかもしれないが、私には川のイメージがある。都会のまん中であれば、いや、真ん中だからこそ、川には魚が泳ぎ、柳でもよい、木があり、人々がそぞろあるけるものがほしい。通り抜けの、ほんの少しでもよい、足には土や砂利でもよいから触れたい。そこに高い木が枝をひろげ、春には芽をふき、夏に葉を繁らせ、秋に落葉をふんでみたい。そういう川や路を市役所のそばにこそ考えてほしい。

今の汚れた川を復活するにはどうしたらよいのか。素人考えでも大変だなと思う。下水の整備はむろん、ずっと上流から

## 〈あとがき〉

「泣いた赤オニ」をよんで  
A 「先生、なんだか変だよ」  
B 「ここんこ(胸)が、へんな気持ちになるよ」  
C 「Sくん涙がでるよ」  
D 「かわいそう。へんな気持ち」  
みんな「もう一度よんで、千回も一万回もいっばいよんで」と言われ三回続けて読む。子どもたちの感情の豊かさがあふれ

川の流れを考えてこねばだめらう。しかし、チームズ川も長期計画でいき返ったという。どの位の費用で、どうすればよいくらいは考えられるのではないか。市の中心にきれいな川が流れている、それだけで、ずいぶんと市のイメージがあがると思うのだが。

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

こちらが胸つまされる思い……。港北区の「みのわ保育園だより」には、子どもたちの言葉が詩のように綴られている。これを読むと、保育園に行っている子どもたちの生き生きとした仲間とのやりとりが伝わってくる。今の都市環境を前提にした場合、「保育に欠ける」とは一体何を意味するのか。「保育園再考」の時期のようだ。(中川)